

中学生に対するノート指導の必要性について

藤 沢 伸 介

ON THE NEED FOR GIVING
JUNIOR HIGH SCHOOL STUDENTS INSTRUCTIONS
IN TAKING EFFECTIVE NOTES

Shinsuke FUJISAWA

Atomi Gakuen Women's University, Niiza-shi, Saitama 352

This paper discusses the necessity of instruction in documentation for junior high level students. At present, most of the high school students take notes in class just as part of their daily routine without thinking of the significance of writing in their notebooks. As a result, 47.3% of junior high school students scrap all of their notebooks and files soon after graduation, and only 13.1% of university students utilize the documents which they wrote out in their junior high school days. This is mostly because information is stored unsystematically without any consideration for utilizing the papers at a later time. 97.5% of high school teachers, however, give no instruction concerning how to write and file papers effectively.

The systematic instruction in the purposes of taking notes, the presentation of the possible methods by which to achieve those purposes, the types and distinctive features of notebooks, and the ways of processing to cope with each subject will improve students' utilization of files and documents, the acquisition of information processing abilities, and the effectiveness of learning content in each subject. Such education will be more and more required in the future.

Key words : information processing education, junior high school students, documentation, filing technique, notebooks, notes.

I 問題の所在

中学校の教室で、もし授業中に全くノートを取らない生徒がいたら、恐らく多くの教師は、ノートをとるように注意するであろう。そしてさらに、その生徒がノートを取らない儘に試験に臨み、その試験の結果があまり思わしくなかった場合には、多くの教師は、ノートを取らないことを学習が充分になされなかった原因の1つと考え、ノートを取るように、さらにその生徒を促すに違いない。

しかしここで、もし、そのノートを取らない生徒が、自分はノートをとる必要性が理解できない、記憶すべき重要な点は全て教科書に書いてあるので、更にノートに記入するのは余計な手間がかかるだけであると、反論してきた時に、その点に対し、中学生にも納得の行くように論理的に明快に答えられる教師が、どれだけいるであろうか。そして、もしそのノートを取らない生徒がいつも上位の成績をとっていたとすれば、ノートを取らないことを不問に付す教師も、少なからずいるかもしれない。

一方で、中学校では、ノートを取るといってもただ黒板をうつしているだけの生徒が9割以上いるが、それに対する指導も充分ではない。

このように、現在、授業中に生徒がノートを取ることにはあまりにも当たり前の事と考えられ、従って、その目的も方法も十分に検討が加えられていない。教師が、生徒に必要性をうまく説明できなかったり、テストの成績が良かったということだけでノートを取らないことを認めたりするのは、ノート作成の目的や必要性が、その教師によって十分に認識されていないということに他ならない。

ところで、人間社会に於いて必要なことは、すべてその目的や理由が明らかになっているとは限らない。例えば、子供に挨拶をするように教える親の全てが、挨拶の社会的機能や目的を説明できるわけではない。しかしながら、子供は経験によって、徐々にその必要性を認識するにいたるものである。

もし、ノートを作成することの目的や必要性がノートを作成していく過程でどの生徒にも自然に認識されていくものであるとするならば、わざわざその目的や必要性を教育する必要はない。しかしながら、筆者の観察によれば、一般の生徒は、単に教師に言われているので、意図もわからずた

だノートをとっているにすぎないように見える。

学校に於ける各教科の学習は、本来それぞれの教育目標に従って行われ、その目標は、人間形成のための大目標の下位目標として設定されており、決してテストのために学習が行われているわけではない筈である。

従って、授業中のノートをとるという行為は、教授するという立場から見れば、意図的に生徒に行わせる活動ということになり、生徒が知的情報を受容していくという立場から見れば、生涯の情報処理に対する初期の基礎的な活動として位置づけられねばならない。そして中学の時に作成したノートは、上級学校に進学する場合には、そこでの情報処理の枠組として活用され、そうでない場合にも、社会生活の中での情報処理の手掛りとして活用されて初めて意味を持って来る。

だから、もし生徒が、定期考査であれ入学試験であれ、テストが終了した時点で自分の作成したノートを捨ててしまうようであれば、それはテストの為にノートを作成したことを意味し、もし、テストとは無関係に自分の活用資料の一部として自分の作成したノートを長期にわたり活用しているのであれば、それはその人が自分の生涯の情報処理活動の一貫としてノートを作成したことになる。

II 生徒のノート活用の実態

そこで、大学生を対象に、各人が中学時代に作成したノートの保存活用状況の調査を行った。対象は、大学生(跡見学園女子大学の教職課程の科

すべて捨てた (105) 47.3%	一部保存してある (117) 52.7%	
	ただ保存してあるだけ (88) 39.6%	現在活用中 (29) 13.1%

FIG 1. 中学時代に作成したノートが大学生にどれだけ活用されているか

社 会 (12) 41.3%	英 語 (6) 20.7%	国 語 (6) 20.7%	理科(4) 13.8%	数学(1) 3%
-------------------	------------------	------------------	----------------	-------------

FIG 2. どの科目のノートが最も保存されているか。

目である「教育心理学」の受講生) 222名で、質問紙法により、1984年12月に実施した。結果は、FIG 1. の通りである。100%全員が、中学時代ノートは作成していたが、47.3%にあたる105名は、中学卒業後ノートをすべて廃棄していた。残りの52.7%は、現在一部保存しているが、これも、大半は唯保存しているというだけで、この内現在活用中のノートが一冊でもあるという者は、13% (29名しかいない。全体の平均保存科目数は1.9科目で、最も多く保存されている科目は社会科であった。FIG 2. は1科目のみ保存している人の保存科目を表わしている。

つまり、86.9%の者は、大学生として現在学校に於ける学習を続行中であるにも拘らず、中学時代のノートを活用していない。ここで活用とは、現在利用している手持ち資料の一部として整理され、いつでも必要に応じて参照可能な状態になっているという意味であるから、保存のみの39.6%も、唯保存されているというだけで、実は、廃棄されているのと本質的には何ら変わりがない。

ということは、大半の生徒は中学生時代に後から活用できるようなノートを作成しておらず、目的も認識せぬままに、当り前のこととしてノートを取り、テストが終わればもう活用もしていないということの意味している。

ノートがあとあと迄活用されない理由としては、次のようなことが考えられる。

- 1) 要点が全て網羅されているわけではない。
- 2) 紙面が整理されていない為に検索がしにくい。
- 3) 規格・形式が不統一で、後に作成する資料と組み合わせることができない。
- 4) 保存価値のある内容と、単なる練習の為に使った紙面とが、1つのノートの中で雑然としている。

これらのことは、教師の側にも生徒の側にも、後から活用できるノートを作成しようという意図なしに、ただ漫然とノート作成が行われている為に起こっているのである。これは、莫大なエネルギーの無駄と言わざるを得ない。

後からノートの不備に気付いても、全てを作り直すことは不可能に近いから、初めから系統的な教育が必要であろう。

Ⅲ ノート指導の実態

ところで、現在のところ学校に於いてノートの

指導は全く行われていないのであろうか。これに関しても、上記大学生を対象に質問紙法で調査を行なった。結果は、小中高の時代に全くノートの指導を受けたことのない者が83名(37.4%)、何らかの形でノート指導をうけたのが139件(62.6%)であった。このように見ると、ノート指導が多く行われているように感じられるが、1人の生徒は小中高時代に平均して25名の教師から習うので、全員のめぐり合った教師の2.5%がノート指導をしているにすぎない。

ところで、そのノート指導の内容であるが139件の内、ノート全般にわたっての指導はたった2件(1.4%)で、残りの137件(98.6%)は、その教師の担当科目について指導しているにすぎない。それも殆どがページ内レイアウトであって、その授業をやり易くする為にどの位置に何を記入するかを指示しているもので、これでは、本人の工夫する可能性を広げる指導とは言えず、他の科目に活用できるような形ではない。ノート全般にわたる2件の指導も、1件は、記入する時に後から追加記入が可能ないように余白を作るように指示、もう1件は、黒板をうつすだけでなく、自分で必要だと思ったことを記入するよという指導があったというのみで、凡そ体系的とはいえない。

英 語	社 会	国 語	数 学	理 科
(49)	(23)	(13)	(10)	(10)
46.7%	21.9%	12.4%	9.5%	9.5%

FIG 3. どの科目の教師がノート指導を行うか

英 語	社 会	理 科	数 学	国 語	家 庭	不 教 科
(11)	(9)	(4)	(4)	(3)	(2)	(1)
37.9%	31.0%	13.8%	13.8%	10.3%	6.9%	3.4%

(重複があるので100%にならない)

FIG 4. どの科目のノートが最も活用されているか

では、どの科目の教員が、自分の科目ノート指導をよく行っているであろうか。FIG 3.は、上記137件の科目別の内訳である。これを先に述べた大学生のノート活用状況 (FIG 4.)と比べてみると、その科目順位はお互いに近くなっている。さらにこれをFIG 2.と比べてみると、より保存されている科目がより多く活用されているわけではなく、より指導された科目がより活用されていることが

わかる。調査対象が跡見学園女子大学の学生だけであるので、全体の学生の代表的な数値と見ることはできないが、それにしても、必ずしも保存してある科目が活用されやすいわけではなく、たとえページ内レイアウトのような指導であっても、指導があればそれなりに活用され易くなることは言えるであろう。従って、単にレイアウト指示のみでなく、ノート全般に対する指導があれば、現在よりさらにノートが後々活用されるようになり、その事によって更に、生徒は学校で学習した内容を後の社会生活で役に立てて行けるようになるであろう。

それでは、中学の段階で必要なノートの体系的指導とは、どのようなものであろうか。その概略について以下に述べる。

Ⅳ 期待されるノート教育の内容

1. ノートの定義

人がある情報処理活動を行う過程で、その時の処理或は後の処理を円滑に行う目的で、主として言語を中心とした記号体系を利用して、作成した書類（document）又は、その書類を作成すること（筆記）を「ノート」と呼ぶ。

2. ノートの体裁

この論文が書かれた1985年現在では、紙に筆記用具を使い、手で文字を書いて記入するのが普通である。しかし、将来的に見て、タイプライタやワードプロセッサを用いてノートをとったり、内容を全てコンピュータのディスクに保存したとしても、ここではそれをノートと呼ぶことにする。

ノートが作成される紙を「用紙」と呼ぶ。日本語の日常語では、この用紙を綴じたもの（notebook）をノート（帳面）、綴じていないものをカードと呼んで区別しているが、単にノートと言った場合、記入された書類を指すか綴じた用紙を指すか紛らわしいので、ここでは、特に但し書きがなければ、ノートと言えは前者を指すものとする。

3. ノート作成の目的

ノート作成の目的は大きくわけて、A.後の情報処理を円滑にする目的と、B.その場での情報処理に利用する目的との2つがある。

A. 後の情報処理を円滑にする目的

①情報の記録

〔受容情報〕授業をうけながら重要点を記録したり、本を読みながら重要点を書き抜いたりするのは、後になって忘れてしまっても記録されてあれば、その情報が利用可能になるからである。

〔生産情報〕授業中、読書中に感想や意見を記録するのは、自分で考え出したものであっても後で忘れる可能性があるからで、後の活用に備える為である。

②情報の体系化

バラバラな知識は役に立たないので、その時に得た情報を全体の中で位置づけ、さらに今後新情報を受容した場合にもそれがうまく組み込めるように、整理し体系化する。

③情報の検索

記録するのは後から利用する為である。情報が多くなった場合は、どこに記録してあるかを全て覚えておくことができないから、情報の検索がやりやすいように、情報は記録されねばならない。

④学習活動への利用（暗記材料としての利用）

学習内容は、理解できればそれでよいというものではない。学習項目を運用する為には、暗記せねばならぬ項目がある。これに対しては、暗記材料を作成する必要がある。テストの直前に、学習内容の「まとめ」のノートを作る生徒は多いが、それはこの目的である。

⑤考察

人間が情報を受容するのは、最終的にはそれを使って新しいことを考えるためであろう。その時に役立つ為にノートが存在するのは言う迄もない。

B. その場での情報処理に利用する目的

⑥選択情報の確認

講義中や読書中にメモをとることで、自分が選び出した項目をその場で確認できる。

⑦考察の補助

普通言語情報は線的に入力する為、全体の構造や要素間の関係が把握しにくい。そこで、情報の体系を視覚化することによって、並列的に情報を処理することができる。

⑧印象づけ

書くという行為は、積極的な生産活動である。情報をただ聞くだけ読むだけの受容に比べ、自分の活動が加わることにより、より印象づけられ、記憶も鮮明になる。

⑨訓練の場の提供

問題演習、表現力練習等、授業中には作業を通じて獲得していくことも多い。その作業の場を提供するのもノートである。

4. 教育すべき内容

実際の教育の場では、A. 目的と必要性の徹底、B. 目的達成の為の方法の例示、C. 用紙の種類と特徴、D. 教科別の実行 の4つが必要と考えられる。

A. 目的と必要性の徹底 目的や必要性を理解しない儘に、何かを実行させると、意欲がわいてこない上、工夫もなされず、場合によっては生徒の反発を招くこともある。まず、目的意識を持たせることが大切である。

B. 目的達成の為の方法の例示 練習用ノートは、その授業の作業内容により最適の形が異なるので、一般論として述べることは難しいが、保存用ノートは、情報の体系化の問題があるので、一般論として述べるのが可能である。TABLE 1は、各目的達成の為には、どのような工夫が可能であるかを例示したものである。いずれも、各種資料作成にあたり、研究施設、図書館、企業等で既に実行済みのものである。経験を体系化し次世代に伝え、次世代の試行錯誤による到達を効率化するのが教育の一機能であるとするなら、方法論上の到達も当然教育すべきであろう。合理的な方法を例示することは、生徒が色々工夫する手掛りとなるのである。この方法論の教育の必要性は、すでに梅棹(1969)によって主張されているが、既に見たように、現在のところ殆ど実践はなされていない。

C. 用紙の種類と特徴 現在の所、用紙やファイリング用品はかなりの種類が開発されているが、それぞれの特徴を熟知して、用途に応じて使われている人は少ない。TABLE 2は、よく使われている用紙類をその綴じ方によって分類し、その特徴を比較したものである。こういった特徴を理解した上で、生徒が自分の情報管理体制を作り上げるような指導が考えられるべきであろう。

D. 教科別の実行 各種文具の効果的な利用法に関して、既にいくつかの本が書かれてい

る。生活システム研究会(1980,1981),かい(1971)等がそれである。しかしこれらは、一般人を対象としたものであって、実際の教育現場で活用することは必ずしも適当でない。中学生位の段階では、一般論を聞いただけではすぐに実践することは不可能だからである。従って、各教科の授業に於いて、練習用ノートに練習を行いながら教科の学習内容を修得していくだけでなく、それと並行して、保存用ノートを作り上げていくことを実行させるとよい。

実行にあたっては、教師は絶えず生徒の実行状況を点検し、形式や内容ばかりでなく、記入のタイミングについても、指導が必要であろう。特に、中学生の段階では、授業を聴きながら考えながらノートをとるということが、まだうまくできない。ノートに書いていると考えないし、考えているとノートに記入できないという者は多いので、タイミングの指導は重要である。

V 予想される教育効果

以上の教育によってあらわれる効果は、次のようなものになるであろう。

1. 教育内容が、卒業後も活用されるようになる。

これまで、無目的にノートを作成していた為に、ノートの多くが廃棄され又は死蔵されて活用されなかったものが、ここでいうノート指導を行えば、大きな体系に従って保存用の資料が作成されていくことになるので、一通りの学習が完了した後でも、新しく受容した情報が、それ以前に蓄積された情報と有機的な関連をもって保存されるようになる。

2. 知識が体系化される。

情報を分類する時には、絶えず全体の体系を意識しなければならぬので、結果的に、知識が断片的な儘で記憶されることがなくなる。

3. 情報処理能力が身につく。

言う迄もなく、保存用ノートを作成していく段階で、分析、比較、分類、追加、整序、総合という判断が絶えずなされるので、情報処理能力が訓練されることになる。

4. 学習の方法が改善される。

ノートの作成を工夫することにより、学習の方法が客観視され、ただ漫然と学習する事が防げる。書くことは、学習の重要な行為であるため、結果的に、学習法が改善される。

TABLE 1.

保存用ノート作成上の工夫

1. 記録 (保存)	記入し易い為の工夫	<ol style="list-style-type: none"> 1) 文で書かずにキーワードのみ記入する。 2) 重要な事だけ記入する。 3) 簡条書きにする。 4) 表の形にまとめる。 5) 追加記入の為の余白をとっておく。 6) 略号を利用して記入時間を短縮する。 7) 少し小さめの字で軽く書くと更に時間が縮まる。 8) 新しい用紙がすぐ用意できる様にしておく。
2. 体系化	分類・追加・整序が簡単にできる為の工夫	<ol style="list-style-type: none"> 1) 用紙の規格を統一する。 2) カード、フィラーノート、ルーズリーフノート等、用紙が綴じてない物に記入する。 3) 記入は、用紙の片面のみにする。 4) 項目が変わる度毎にページを替える。 5) 記入の形式を統一する。 6) 全体の体系を予め考え、項目毎に分類番号を付けておく。
3. 検索	直ぐに必要な情報が探し出せる為の工夫	<ol style="list-style-type: none"> 1) 日付・分類番号等を付ける。 2) ページ毎、項目毎に、見出しを付ける。 3) キーワードを欄外に書き出しておく。 4) 重要な点は、色を付けたり、枠で囲んでおいたりする。 5) 文字の大きさを統一する。 6) 予め表の形に記入する。 7) タックインデックスを付ける。 8) 各種記号を利用する。 9) ページ番号を付け、目次を作る。 10) 索引を作る。
4. 考察	見ながら考え易くする為の工夫	<ol style="list-style-type: none"> 1) 文で書かず、キーワードのみ記入する様にする。 2) 漢字を多く使う様にする。 3) 重要部分を目立たせる。 4) 図解、表解の形にする。 5) 本質が同じ物は、同じ色を使って表わす。 6) 矢印を効果的に使って関係を表わす。 7) 文字を奇麗に書く。 8) 思い付いた時に自分の意見を記入しておく。
5. 暗記	資料がそのまま暗記材料になる為の工夫	<ol style="list-style-type: none"> 1) 内容に応じて記入の位置を揃え、隠して練習できる様にする。 2) 図解、表解の形にする。 3) 思い出す為の手掛りや、記憶法等を、一緒に記入しておく。 4) 問答の形式で記入するのも良い。

TABLE 2.

綴じ方別用紙の特徴と用途

帳面の種類 比較項目	糸とじノート	スパイラルノート	グルーノート	ルーズリーフノート	フィラーノート
ひらき方	<ul style="list-style-type: none"> ○ 360° 開くが糸がゆるむ ○ 長期間使用すると背中が破れる 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 360° 開いてもゆるみはこない ○ 書く時にスパイラルに手があたる ○ 左右ページの行の高さがずれる 	にかわがしっかりしていれば 360°開ける	用紙に記入してから綴じるのであれば開く必要はない	360°開いてもゆるみはない
1枚抜ききった時の状態	残りがぬけてしまう	OK	OK	OK	OK
背見出し	狭すぎて記入しにくい	つけられない	狭いが、背が平らなので記入可能	バインダにつけられるものもある	フラットファイルには十分な見出しのスペースがあるのでOK
すきまなく棚に並べることが可能か	OK	スパイラルがからまることもあり、無理	OK	バインダの形が固定しているので楔型になり棚から落ちることがある	厚みが自由に調整できるのでOK
厚さの調節	不可	不可	不可	何種類かに固定される。但し用紙の枚数は自由	OK
用紙の挿入	不可	不可	不可	OK ただし普通紙は26個穴をあける必要がある	OK 普通紙をとじこむ時は2つ穴をあければよい
順序の入れかえ	不可	不可	不可	OK	OK
値段	安価	普通	普通	用紙は安いバインダが高価である	普通 フラットファイルは安価
用途	<ul style="list-style-type: none"> ○ 練習用ノート ○ ページが固定されていた方がよい場合に向く 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 360° 開いて使う場合に向く 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 糸とじノートと同じ ○ 但し、ページを抜きとる可能性のある場合にも使える 	バインダが丈夫なので携帯に向く	<ul style="list-style-type: none"> ○ 保存価値のある要点整理ノートに向く ○ 情報管理が体系的に安価にできる
学習における事例	<ul style="list-style-type: none"> ○ 計算練習 ○ 綴り練習 ○ テストノート 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 単語帳などの暗記材料 ○ 野外観察記録など机のない所で記入するのにも向く 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 糸とじノートと同じ ○ 見開きで記入し考察を加える学習にも使える 	フィラーノートと同じ使い方ができるが、本格的にこれで情報整理をするのは高価すぎるので、フラットファイルとの併用がよいかもしれない。	<ul style="list-style-type: none"> ○ 各科要点整理ノート ○ 各種データベース ○ 配布教材の綴じ込み

5. 学習に積極的に取り組めるようになる。

書くという積極的な行為を通じ、学習に対する取り組みも積極的になるであろう。人から与えられた学習材料に比べ、自分で作成した学習材料は、活用の意欲も刺激すると思われる。

6. 資料整理法は、教科以外にも転移する。

ノート作成によって、情報が視覚的に整理されるので、それに倣って、生徒は自分の趣味の分野やその他必要な分野に簡単に応用ができるようになる。

7. 学習時間が能率化される。

定期考査の直前に、全体の体系を掴む為再度纏め直しをする生徒は多い。初めから要点がノートに整理されていれば、その時間が短縮される上、暗記材料を2重に作成する手間が省けるので、学習時間が能率化される。

8. 複数教材の調整に悩まずに済む

中学生や高校生の中には、学習の中心を教科書に置くべきか参考書に置くべきか迷う者も多い。完璧な学習をしようとする場合には、両者の重複部分を捜し出し、そこに関してはどちらかの教材で学習し、重複していない部分に関しては両方の教材を学習しなければならない。この点で、もし中心が自分のノートであれば、多くの教材を手がけたとしても、自分のノートが完璧に近くなるだけで、繁雑な調整をせずにすませられるという利点を持っている。

VI 情報処理教育の必要性

以上の考えに基づいて、1984年4月筆者は教職課程を履習する大学生に対し、ノートのとり方の授業を試験的に行った。教科別の指導は長期間を必要とするので省略し、とりあえず、TABLE 1. 及びTABLE 2. に示された内容の講義を行った。目的は、大学生のノートの使用法の改善ということもあるが、中学校、高校と学習を継続してきた段階でノート指導をうけ、その必要性や、指導の必要な時期に関して、どのような反応をするかを知る為である。

直後に反応を求めるのでは、自分で実行して色々試してみる時間が不充分であるため、7ヶ月後の1984年12月に、その授業を想起させ、ノートの作成法を含む情報処理教育の必要性について、学生の反応を質問紙により求めた。結果は、106名のうち、必要であるという解答が105名(99.1

TABLE 3. ノートの指導はいつ必要か
(大学生の意見)

	人数	%
小学校時代	9	8.6
中学校時代	83	79.0
高校時代	5	4.8
大学時代	1	0.95
小学校及び中学校 時期について無回答	2	1.9
4	3.8	
教員にこそ必要	1	0.95
	105	100%

%)、不要という解答が1名(0.9%)であった。不要であるという者の理由としては、わざわざ指導をしなくとも、各自の工夫によりノートの作成は改善されるというもので、この不要論者も、学習に於けるノートの果たす役割の重要性を否定するものではなかった。

又、必要であるとした者には、さらにいつの時期に必要なか尋ねたところ、結果はTABLE 3. のようであった。試験的授業の際には、普通の大学生対象の授業として行っており、中学生用ということは伝えていなかったが、筆者の意図通り、中学生の時期が最適であるという印象を持った大学生が最も多かった。

学習量や学習内容の体系性から考えて、ノート作成の指導は、中学生の時期から開始するのがよいと思われる。又、中学時代は筆記のスピードが急速に増加する時期であるし、社会に出てから役立つことも考え併せると、義務教育中に指導しておく必要があるのでは、やはり最適な時期は中学時代ということになるであろう。

ところで、よく指摘されていることであるが、現在はテクノロジーが進歩しすぎており、それによって生み出される新しい環境に対して、人間が十分に適応できていない為に、様々な問題が生じているといわれる。問題が生ずるところまでは行かないまでも、我々は必ずしも情報機器を十分に使いこなしているとはいえないことも多々ある。

例えば、コンピュータは導入したものの、どう活用したらよいかわからずにもてあましている企業体は多い。これは本末顛倒であって、本来は、情報処理機構が十分に整備されている状況で、人間が行うことのできない部分をコンピュータに実行させるという方向であるべきであろう。

1984年8月に行われたNHKの世論調査部の調査によれば、小学生の2.6%が自分用のコンピュータを保有（ゲーム専用機まで含めれば16.5%が保有）しており、コンピュータは家庭にまで普及する兆しを見せている。

現在の所、大半の小中学生はゲーム機としてコンピュータを利用しているにすぎないが、これではコンピュータの機能を十分活かしているとは言えない。教育上、もっと有効な利用法があって然るべきである。

このように有効な道具が身近にありながら、子供達の主たる情報処理活動である学校の授業が、旧態依然たる方法で行われているというのでは、ますます技術の進歩と適応可能なレベルとの差が開いてしまうことになる。

本論文では、ノートの指導ということを中心に、情報処理教育の必要性を論じたが、これからの社会に充分適応し得る人材を育成するという立場から、教育の機能を考えることができるとするならば、情報処理教育は、単にノート作成の問題だけでなく、各種データベースの作成や利用法、処理手順の作図化、シソーラスの活用法、各種発想法の修得等にも広げられるべきであろう。

以上の理念に基づき、現在筆者は、中学生を対象に試験的に情報処理教育を実行中である。この成果については、別の機会に述べるつもりである。

引用文献

- 梅棹忠夫 1969 知的生産の技術 岩波書店
甲斐清通 1971 やさしい情報整理 社会思想社
生活システム研究会 1980 知的文具図鑑 立風書房
生活システム研究会 1981 知的インテリア図鑑 立風書房